
～吉良吉影は静かに生き延びたい～

どくたあ☆ちょこら～た

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吉良吉影は静かに生き延びたい

【Nコード】

N6146Y

【作者名】

どくたあ☆ちよこらゝた

【あらすじ】

——これは『【呪い】を解く』物語——

自覚症状無く進行してゆく病のように杜王町を蝕んでいた、一人の男。彼の名は【吉良吉影】——二度殺された筈の彼が目覚めたのは、彼岸花の咲き誇る異様な墓地だった。その場所の名は【無縁塚】、実体と幻想、幽世が交わる異常な空間。そこで突如【謎の少女】の襲撃を受け、彼は否応なしに【幻想郷】へと迷い込んでゆく。

【忘れられて生きる】ことを望む彼に【運命】が下した罰、それは【忘れられた者達の世界】で生き、暴かれ、晒され、殺されることであった。

【裁きの地】で彼を待つものは、【救い】か、【報い】か。

ジョジョの奇妙な東方Project避難所【<http://jbs.livedoor.jp/otaku/11393/>】より
転載。

第一話 外の世界から来た殺人鬼（前書き）

初めまして、どくたあ☆ちよこらくたと申します。

ジョジョの奇妙な東方Project避難所【<http://jbs.livedoor.jp/otaku/11393/>】にて、キラ☆ヨシカゲの名前で活動しております。

完結間近の連載小説をこちらに転載することにいたしました。

稚拙な文章力ですが、読んでアドバイスをいただけると幸いです。

注意

・「東方project」「ジョジョの奇妙な冒険」の二次創作作品です。

・自己設定、自己解釈、ご都合主義、キャラ崩壊、原作に登場しない能力の成長、グロテスクな表現、暴力シーンを多量に含んでおります。

第一話 外の世界から来た殺人鬼

「吉良吉影は静かに生き延びたい」

第一話 外の世界から来た殺人鬼

彼は、目を覚ました。

「ここは………？

彼はゆっくりと体を起こし、辺りを見回す。見渡す限り真っ暗闇で、暫く何も見えなかった。やがて暗闇に目が慣れ、周りの景色が朧気ながら見えるようになる。

「そこはうつそうとした夜の森にぼっかりとあいた、

彼岸花が咲き乱れる広場だった。

空を見上げたが、新月だからだろう、全く明かりのない暗黒のプロネタリウムが目に入るだけだった。

「……………なんだ……………？」

どうしてわたしはこんなところにいる……………？ここは……………何処なんだ……………？わたしは……………」

彼は地面に座ったまま、どうして自分はこんなところに倒れていたのか記憶を辿る。

「(……………確か……………私は【バイツァダスト】を発動させようとした……………だが広瀬康一のクソガキに阻止され……………承太郎に時を止められて……………その後は…………………………」

迫るタイヤ

犬に喰い千切られ

た左手

無数の手

引き裂かれる体

……………さあ……………でも……………「安心」なんてない所よ……………少なくとも……………」

「うああああああああアアアアアア————！！！」
全てを思い出し、男————吉良吉影は、絶叫した。

「（そうだ…私は死んで……………！）」
汗がダラダラと噴き出し、息が荒くなる。

ドグン———ドグン———
一度はその鼓動を停止した心臓が恐怖に縮み激しく脈をうつ。

「（—————ッ！？）」
再び辺りを見回すと、さっきは気付かなかった光景がはつきりと目に飛び込んで来た。

そそりたつ卒塔婆
墓石代わりに積まれた石
散らばった人骨

辺りに満ちる【死の気配】と、撒き散らされた鮮血のように紅い華が、彼に否応なしに———
【死後の世界】というものがあるなら———
【安心】なんてない、【最悪の世界】を連想させる。

「—————ハア—————
——ハア———ッ——ハア——
——ハッ—————」

（ば…………馬鹿な…………ッ！？まさか、まさかッ！？
ここが【地獄】だと言うのかッ！！）」

彼は胸を押し潰す不安を押さえつけ、自分を裁く【鬼】が現れるの

を迎え撃つため神経を張り詰める。

「（そういえば【スタンド】は使えるのだろうか？）」

彼は祈るような気持ちで、自身の精神の片割れの名を呼んだ。

「【キラークイーン】！！」

彼の心に応えるように、それは隣に出現した。

猫とドクロを足して2で割ったような凶悪な顔、筋骨隆々の四肢、そして全身のドクロマーク。

彼の【スタンド】、【キラークイーン】だ。

「—————よし、【キラークイーン】は問題なく使えるな
……………」

吉影はホッと安堵の溜め息を吐く。

ともかく、これで多少の危機には対応できる。

吉影の心に【安心】が染み渡っていき、同時に幾分か冷静さが戻ってくる。

「（—————ここで座り込んでいたって仕方ない。

地獄に森があるかは知らないが、どうも肉体は実体があるようだ。

それに、落ち着いて考えてみれば地獄に卒塔婆や墓なんてのも妙な話・・・

もしかしたらここは【地獄】ではなく、【この世】のどこかなのかも知れない。

それなら早くこんな場所抜け出して、人の営みのある場所に向かうべきだろう。）」

吉影は立ち上がり、辺りを見回そうとした時、

「うおっ！！」

吉影の目の前に、突然1人の人影が現れた。

「（—————なんだ、子供か……）」

彼の前には、一人の少女が立っていた。

ほっと息をはく吉影。

その少女はどうみても日本人には見えなかった。

森の闇に映える金髪、赤い目、白い肌、欧米人の風貌である。

「(どういうことだ……? こいつのこの【風貌】……………まさかわたしは日本から遠く離れた国まで飛ばされたというのか……!?! 一応英語は話せるが、この娘に通じるだろうか……?)」

—————吉良吉影は、このとき、冷静さを若干喪失していた。

死後起床したばかりなのもあっただろう、が、何より自分の置かれた状況の把握に気を取られ過ぎていたのだ。

そう、彼は疑問に思う事はなかった。

『なぜこんな暗い夜の森の奥に、こんな少女が一人でいるのか』

さて、吉影はとりあえずその少女の様子を伺うことにした。
少女はまじまじとこちらを観察するように、現れてからずっと好奇の目で見ている。

「(何から話そう…取り敢えずは適当な挨拶を交わし、会話が通じるなら自宅まで案内してもらおうとするか。

ここが何処なのかその後訊けばいい…)」

吉影が口を開こうとした時、

「—————ねえ、あなた……………」

少女が口を開いた。

「(?)」

こいつ……今なんと言った? 日本語か?

聞き違いかもしれないが、一度日本語で話し掛けてみるか。)」

吉影は【いつも通りの】柔らかな物腰で、少女に話し掛けようとした。

「あの、すまないが—————」
その刹那—————!

「あなたは食べていい人類？」

少女がニッと不気味に笑った。

ドドドドドドドド！！

「—————なァ…ッ！？」

瞬時にキラークイーンを構え、少女が放った光弾を弾く。

「うおおおおおおお！？」

あまりに突然、かつ大量の光弾だったために、防ぎきれず、何発かが吉影に命中した。派手にブツ飛ばされ、樹に背中をしたたか打ちつけた。

「ガフッ…！」

地面に膝をつき、傷を抑える。肉が抉れていた。

「（いっ…今のは何だ……？）

危なかった…！全弾受けていたら即死だった…！！…）」

常人なら今の数発でもしぬかもしれないが、彼はすぐに立ち上がり、構える。

「（何なんだこのガキは！？

キラークイーンを見ていない様子からしてスタンド使いではないようだが……

少なくとも、それに準ずる【超越した何か】を身に着けていることは間違いない…。」

そいつは吉影をさらに好奇心をこめた目で見ていたが、やがて口を開く。

「ねえ、今何をしたの？私の弾幕を弾いたように見えたけど。」

「（……やはりこいつには【キラークイーン】は見えていないらしい。

このクソガキが何者かはまだ分からないが……ならばいくらか私のほうが有利！）」

「おい、お前。さっき私に食べてもいい人類かと訊いたが、君は人間ではないのか？」

「ああ、あなた私のことを知らないの…？もしかしてあなた外の人

間？」

少女はあどけない表情で彼に質問した。

「……………」

吉影は無言でポケットから何かを取り出すと、少女に向かって投げつけた。

少女はそれを手でキャッチし、

「何これ？甘そうな匂い……」

なんだかとても美味しそう」

それ————チューインガムを口に入れた。

「うーん、甘い♪」

ガムを噛みながら、少女は幸せそうに笑う。

「言っとくけど、これの代わりに見逃してくれなんて、聞くつもりはないよ？」

これを食べたらずぐにでも……………」

「——————質問に……………」

「？」

「質問で返すなアアアッ！！」

カチッ

吉影は【キラークイーン】のスイッチを押した。

ドグオオオオオオオ！

「きゃああああああ……………！！」

少女が断末魔の叫びを上げた。

強烈な衝撃が彼女を内側から襲う。

少女はバタリと倒れ、動かなくなった。

「【キラークイーン第一の爆弾】……………お前の脳ミソは3分の1ほど顔面とシェイクされた。」

吉影は倒れている少女を冷徹に見下ろし、呟いた。

「(——————スタンド使いではない、それは言える。

だが、あの【光の弾】は何だ？それにこいつは、自分は『人間ではない』かのような言動をした。

『食べてもいい人類』……『外の人間』……

一体こいつは何でここはどなんだ……？」

「(—————) 考えても仕方ない……とりあえずは【今最優先すべきこと】をするとうしよう……」

彼は少女の死体に歩み寄り、見下ろす。

「—————フフフ…、しばらく出来なかったが、ここにあるのクソツタレ仗助がいないことは確実……

今なら安心して【彼女】を連れて歩くことができるぞ！」

【キラークイーン】の腕が振り上げられる。

「さあ………」

私の下に来い！！手首だけなッ！！」

【キラークイーン】の手刀が、振り下ろされた！！

メキメキという音が静けさを破壊し、飛び散る鮮血が森の闇を塗り替える！！

「—————な…ッ………」

吉影が、絶句した。

「何だとオ……ッ?!」

吉影の顔が苦痛に歪む。

「そんな馬鹿な!？」

少女の手が、吉影の足を握り潰していた。

「ぐおおおおお!?」 足が悲鳴をあげる。

今にもちぎれそうだ。

「捕まえた♪」

少女が顔を上げ、吉影の顔を見上げた。

その顔には傷も内側から力を加えられた跡も残っておらず、目は爛々と喜びに輝いていた。

もっとも、その輝きは子供の無邪気な笑顔とは程遠い、悪事が成功した時の邪悪な喜びからくるものだったが。

「（確かに効いたはずだ！脳をシェイクされてもこれほど元気など、たとえ人間でなくてもあり得ん！）」

「えへへっさっきのはちよっと驚いたよ。」

でもこれで…逃げられなくなったね！」

「ぐあああああ！！！」

少女の手に力が加わる。足の肉は裂け、骨もヒビがはいってきている。

「（マ、マズイ！このままだと足を持って行かれる！！）」

「【キラークイーン】ッ！！」

スタンドの脚で少女の顔面を全力で蹴り飛ばした。

「きゃあっ…！」

少女は吹き飛び、木に打ちつけられてずるずると倒れた。

「ハア…ッハア……」

吉影は足の具合を確かめる。

「（クソッ！なんて馬鹿力だ…この足ではとても逃げられん…）」

吉影は舌打ちし、少女を睨み付ける。

「やっぱりあなた、普通の人間じゃあないね。念力のような力なのか？」

少女は先程と同じように平然と起き上がった。さすがに今回は頭から大量出血しているが。

「（畜生め…！！何故あれほどの傷を受けて立っていられるんだ！？）」

腹に大穴があいている彼も大概だが、吉影は少女の頑強さに胸の内です毒吐く。

「さっきは不意打ちでやられたけど、今度こそ晩ごはんのメインディッシュにしてあげる！」

吉影は直感した、何かがくる…！！

「【キラークイーン】ッ！！」

彼のスタンドに防御の構えをさせる。

「ブラックアウト!!」

少女が声を張り上げた次の瞬間、少女の体がどす黒い霧に包まれ、霧は瞬く間に吉影を飲み込んだ。

「(な、なんだこれはッ!?)」

吉影の視界は墨で塗り潰されたように黒一色に染まった。

「(まずい、これでは防御が…!)」

ドドドドドドド!

「ぐおおおおお!?!」

キラークイーンの手を抜けて、十発近くの光弾が吉影の体を抉る。

「あぐああアアアアア————ッ!」

暗黒の視界の中、衝撃で吉影の身体は宙を舞った。

突如視界に光が差し周囲の光景が見えるようになった。

彼はさっき立っていた場所から吹き飛ばされ、木の生えていない明るい場所に倒れていた。

「あゝっ、どうやら当たったみたい♪」

少女は空に浮かび、こちらに近寄ってくる。

「(こいつ…命中したことが分かっていない…?)」

つまりこいつも見えなかったのか?

ということはこいつの能力は……『【闇】をあやつる能力』か!!(

」

しかし分かっててもどうしようもない。熱源を追尾する【シアーハ

ートアタック】なら通用するかもしれないが、光弾が直撃して暴発

する可能性が高く使えない。

「さあ…次でトドメだよッ!」

少女の体が再び霧に包まれる。闇が彼を呑み込もうと迫りくる。

「(こ…ここまでののか……?わたしは……)」

せっかく生き残ったというのに……!またわたしは死ぬのか……!?

このガキに喰われて…!?)」

彼は、空を見上げた。

月の無い漆黒の夜空は、彼の心情を反映するようにその暗黒なのっぺりとした面を向け見下ろしていた。

「(この【新月の夜空】のように……! 【暗闇の絶望】の中死ぬというのか……ッ! 一度ならず二度も……)」

その時、吉良吉影の脳内に最悪の情景が浮かんた。

河川で

下水道で

解剖室で

広場で

街道で

この地上のありとあらゆる場所で残酷に死に続ける自分の姿を。

「(まさか……これが【小道の力】だというのか……? 永遠にこのわたしを【死】という地獄に捕え続け…… 【無間地獄】を味わわせようというのか……ッ?)

【希望】なんてどこにも見えない…… 【地獄の底の底】に、わたしを閉じ込めるつもりか……? そんな……そんな馬鹿なア……ッ!)」

彼は、無意識に爪を噛んでいた。絶望、その二文字が彼の心を支配していた。

少女の放つ闇が、吉影に襲い掛かる。

「(……………いや……)」

吉影の瞳に、突如光が灯る。

「(わたしは、確かに死んだ……だが、今生き返っている。これはあり得ない【奇跡】……!)

まだだ……まだ終わってない! 【運命】はわたしに味方しているッ!

このクソガキはッ……！【試練】だ……！わたしが乗り越えなくてはならない【敵】だッ！」

闇の霧が吉影の視界を染めた。

闇に包まれる吉影。

無差別に飛び交う光弾。

「さあ、今夜は久しぶりの人肉だ〜♪」

少女ルーミアが能力を解除した。再び星の光が森の中を照らす。その星明かりの中には、さっき殺した人間の死体が転がっている……はずだった。

「えっ何で……？」

ルーミアが星明かりの中に見たのは、無傷で宙に浮かぶ吉影の姿だった。

「そんな、全弾当たったはず！だって何処にも弾が木とか地面に当たった跡が……」

「そうだ、確かに当たった。だが、それらが全く効いていなかったとしたら？」

「そ、そんな！？あなた……本当に人間？」

「いいや、私は吉良吉影……殺人鬼という名の鬼だ。」

吉影は、上半身だけが宙から現れたかのような不思議な姿勢で浮かんでいた。もしスタンド使いがこの光景を見ていたら、トリックが分かっただろうし、もう少しさまになっていたはずだ。

彼は自分の身体をキラークイーンの腹部に収納し、身を守った。

つまり彼はキラークイーンを鎧にしたのだ。

「（【ストレイ・キャット】を入れていたスペースに、こんな使い方があったとは……」

窮屈であることを除けば、最高の防御だ。キラークイーンもかすり傷程度で済んでいる。」

吉影は腹部の中からキラークイーンを見た。半透明でショッキング

ピンクの肉体は暗闇の中普段よりさらに禍々しく、不気味に、そして艶かしく輝いていた。

「くっ、だったらもう一度…」

少女が追撃を加えようと身構える。が、吉影はそれを制した。

「無駄だ、既に行動は終わっている!」

「ハッ!!」

ルーミアは自分の体を見た。

「そんな!？何でさっき吐き出したものが…」

彼女の服には、ガムがべったりと付いていた。

「お前は、自分の作り出した闇の中で、ものを見ることが出来ない。また、お前は最初に闇を解除した時、闇を作った時と同じ場所にいた。つまり!!」

吉影が勝ち誇ったように叫ぶ。

「あの光弾乱射…自分も捲き込まれるんだろう？迂闊に動くとは…」

少女がギクツという擬音がよく似合う反応をした。

「そして、動けないなら目が見えなくともガムをぶつけることは容易い!」

少女ははっと気付き、ガムを取ろうとするが、なかなか離れない。

「遅い!! キラークイーン第一の爆弾!」

ドグオオオオオオオオオオ!!

ガムが爆発した。

第一話 外の世界から来た殺人鬼（後書き）

ご覧いただき、ありがとうございました。

次話以降も順次更新していくので、ご期待ください。

第二話 漂着 (前書き)

第二話です。説明回なのでまだあまり盛り上がっていませんが、次話あたりから面白くなるかと思われます。

では、御覧ください。

ジョジョの奇妙な東方Project避難所【<http://jbbs.livedoor.jp/otaku/11393/>】より
転載

第二話 漂着

「……………むっ……………?」

「わは」

爆煙が晴れ、吉影が目を開けると、少女が宙を飛び逃げていくのが見えた。

「直前に服ごと破り捨てて逃げたか……………」

吉影は追いかけるのを諦め、【キラークイーン】の腹部の空間から出ると、足の様子を確認する。

「…………不味いな、立っているのがやつとだ…」

かといって、ここにもさっきの奴みたいなのが襲ってくるかもしれない……………」

顔をしかめ、辺りを見渡す。

吉影が倒れていた広場からかなり吹き飛ばされ、彼は赤い彼岸花の咲き誇る道に立っていた。

葉が無く、先端に大きな赤い華をつけた花が、地面から何本も真っ直ぐに生えている。

「……………この場所の名は【再思の道】。」

彼岸花の毒に冒され、不快感とともに生きる気力が湧いてくる不思議な場所である。

そして、外の世界から迷い込んだ自殺志願者たちはここで生きる活力を与えられ引き返していくのだが、再び生き直そうと決意した矢先、彼らを待ち受けているのは大抵が不遇な死なのだ。

そんな呪われた場所に立っていることを、その時の彼は知るよしもなかった。

「……………凄い数の彼岸花だ……………」

おかしい…彼岸花の季節は秋…今は夏の筈だが……………」
言いかけて、ブルツと身体を震わせる。

「……今まで気付かなかったが……………幾分か肌寒いな。」

【小道】のパワーに引きずられてここに出るまでに、季節が変わったのだろうか……………」

しかし、そう言いながら吉影は少し違和感を覚えていた。なんと言おうか、肌寒さの中に命の芽吹きのような活気を感じたのだ。

ふと、背後に気配を感じ、彼は振り返った。

「……………!」

目に入った光景に、目を見開く。

広場の中、寂しげに立ち尽くす数本の桜。さっきまでは葉が全て落ち、冬の生命力が枯渇した様相を示していた、
筈だったが、

「な……………」

——信じがたい事だが、蕾がひとつまたひとつと枝先に現れていく。

瞬く間に蕾が目に見える様子で一斉に開花していき、忽ち満開となった。

絢爛たる紫色の桜花がはっと息を呑むほど美しく、咲き誇る。

かと思うと、その刹那桜花は風に吹き千切られるようにはらはらと散っていった。

その情景はこの場所全体が、結界の狭間の犠牲者たちを弔う追悼の涙を流しているようで、見る者に儚くもの悲しい印象を与える。

花びらは地面に落ちると、粉雪が溶けるように朽ち堕ち、消えていった。

「……………」

「……………」

放心したように、瞬きひとつせず一連の現象に魅入っていた吉影は、
我に返り、ふと自分が涙を流していたことに気づいた。

「（なんだ……？何故わたしは……）」

この場所——無縁塚が哭いているような錯覚、水を打ったような静寂と、舞い散る桜花の美しさと哀しさに、知らず知らずのうちに感涙したというのだろうか。

訝しがりつつも、吉影は涙を拭い眩く。

「————理解できないが……恐らく、今は春だ。彼岸花が咲いてはいるが、とにかく春だ。なぜかそういう【確信】がある……」

問題は、この見知らぬ場所が明らかに異様な土地だということである。

寂れ荒れ果てた墓地、春だというのにこの場所を守るように入り口に咲く彼岸花の群れ。なんらかの【小道】との関係を示唆しているように思えてならない。

「……ここにこれ以上いるのはマズイ……一刻も早くこの場から離れたいが……」

【キラークイーン】に支えてもらい、彼岸花の道の向こうを一瞥した。墨を流したような闇が広がっている。

「……この彼岸花の道を通って森に入って行こうというのは、気乗りしないな……またさっきのクソガキのような【得体の知れないヤツ】と出くわすかもしれない。」

彼は上を見上げた。森の木々にぽっかりとあいた穴から、暗い夜空が顔を覗かせている。

「【キラークイーン】、私を木の上まで運べ。」

彼のスタンドは命令に忠実に命令に従う。

【キラークイーン】は吉影を抱えると、木のとっぺんまで一気に飛び上がった。こういう時、スタンドは便利だ。四肢の不足分を補ってくれる。ただ単に怪力だったり【能力】を持っているだけでは、こうはいかないだろう。

一際高い樹の枝に登り、足を下ろすと、鬱蒼と生い茂る枝葉の上から周囲を一望することができた。

「おお………」

目を見張る光景に思わず絶句する。新月の夜空に、杜王町のそれとは比較にならない程の星が煌めいていた。

「おお…なんと綺麗だ………杜王町も星が多く見えたが、ここに比べれば…」

今にも落ちて来そうな空の下で、彼は圧倒されていた。

しばらくは新月の星空を眺めていたが、

「……………ぐうッ………!？」

左脇腹に走った痛み、顔を歪める。

「……ううっ……!？」

目を下ろすと、光弾を受けた部分が大きく抉れていた。

「…暗すぎてさっきまで気付かなかったが…かなり酷い……」

幸い、内臓は傷んでないようだが、出血がマズい……早く何処かで手当てしなくては………」

『どうやって人のいる所へ行くか』だが……」

吉影はしばらく思案を巡らせ、ある案を思い付いた。「うまくいくかわからないうえ、失敗したらさっきの奴みたいなのに見つかるかもしれないが……やるしかないな。」

右腕で吉影を支えながら、【キラークイーン】が左拳を空に掲げる。

「『キラークイーン第二の爆弾』、【シアーハートアタック】！」

【キラークイーン】の左手の甲から、一発の小型爆弾戦車が放たれた。吉影が【シアーハートアタック】に命じる。

「【標的】は熱源の密集している場所だ。探せ!!」

戦車は吉影の頭上遥か高くまで上昇し、ぐるぐると旋回し始めた。

しばらくそうやって熱源を探していたが、

「コツチヲミロォ」

「むっ、見つけたか？」

【シアーハートアタック】の向いている方向を見ると、盆地になっている場所が見えた。かなり広い。

「でかしたぞ【シアーハートアタック】！もう戻っていい。」

ほつといたらそこら中の熱源に特攻しかけないので、すぐに【シアーハートアタック】を【キラークイーン】左手の甲に格納した。

「さあ、【キラークイーン】、私をあそこまで連れていってくれ。」

【キラークイーン】が彼を担ぎ上げ、木の上を軽快に跳び跳ねていく。

酔うかと思ったが、意外と乗り心地は良い。

盆地がぐんぐん近付いてくる。

それにつれて、盆地から漏れてくる光や賑やかな音、人の気配が感じられるようになった。

「よし、当たりだ！間違はなく人が住んでいる！」

しかし、ここでさっきの少女が頭をよぎった。

しかし、ここでさっきの少女が頭をよぎった。

「待て……もしここにいるやつらがさっきのクソガキみたいなのばかりだったらどうする？」

一度【キラークイーン】に足を止めさせると、しばらく思案に耽った。

「それに、あのクソガキは欧米人の風貌をしていた。日本語を話していたが、ここが日本だとは限らない。何の調査もせず近付くのは【慎重さ】に欠けた行いだ……」

とりあえず出来るだけ近寄り、【シアーハートアタック】を発射してスタンド使いがいなかだけでも探ってみるとしよう……」

【キラークイーン】に命じ、さらに近付く。やがて樹木限界線に到達し、盆地の様子が分かるようになった。

「なんだ、ここは……」

盆地の中には、塀に囲まれた村があった。

「どういうことだ？この塀、この家、まるで時代劇じゃないか……！？」

テーマパークかと思ったが、石垣の様子などが作り物ではない本物であるという事実を物語っている。

「一体どうなっているんだ…？私はどこにいるんだ？さっきのガキは何者なんだ？」

それともやはり既に死んでいて、ここは時代も地域も一つに重なった全人類共通のあの世だというのか……………？」

てつきり西洋まで飛ばされたと思ったら、今度は時代劇である。どこか拍子抜けし、このカオスな現象に頭を抱える。

頭を抱え、考えをまとめようとした時、脇腹に痛みが走り思考を中断する。

「ぐっ……………だが、今はそうは言っていられない……………寒気が酷くなってきた……………頭痛もする……………」

……………とにかく、近くに行って様子をみるしかないか……………」

樹上から飛び降り、明かりと喧騒に向かって数歩歩き出したそのとき……………」

「なっ……………！？」

ガクン

彼の身体は一瞬、宙に浮いたかのような感覚を伴ったあと、一気に沈んだ。

里の明かりにばかり注意を払っていたため、足下の水田に気付かなかった吉影は見事に足をとられた。

落下の拍子に頭を強く打ち付け、意識が薄れていった。

……………彼は、目を覚ました。

「……………ここは……………？」

彼は体を起こし、辺りを見回す。そこは、彼の住んでいた家のような、畳敷きの部屋だった。彼は畳に敷かれた布団に寝かされている。

た。

「（……ウーム、どうやら私はあの後気絶していたらしい。そしてここはおそらく、あの塀に囲まれた里の民家……）」

障子から分かる外の様子だと、夜らしかった。

あれから何日経ったのかは分からないが。

彼はふと自分の体に目を落とし、驚愕した。

「（傷が完治している……！？腹に大穴があいていたというのに？）

」

事実、和服に着替えさせられた彼の体に刻まれていたはずの、光弾を受けた際の生々しい傷は跡形も無かった。

足も確認するが、骨もちゃんと治っていた。状況的にこの家の持ち主が治療を受けさせてくれたのだろうが、彼は警戒を緩めない。

「（……………この連中はあのクソガキのようなやつらののだろうか？とりあえずこの家の住民だけでも信用できるか確認しなければ……傷の手当てだけでは完全には信用できない……）」

吉影は立ち上らずに、スタンドを出現させ、襖を通過させようとして、

「ああ、もう目覚めていたのか。1日中目覚めないから心配していたんだぞ。」

「！！？」

襖が開き、住人らしき人物が入って来たので、慌てて【キラークイーン】を引っ込めた。

「やあ、初めましてだな。私は上白沢慧音。この人里で寺子屋の教師をしている者だ。」

彼女の自己紹介は吉影の耳には入っていないかった。彼の脳内には目まぐるしく様々な考えが入り乱れていた。

「（……………青みがかかった白髪、蒼い目、そして奇抜過ぎる…帽子？なんだこいつは……！？日本人なのか？そしてここは……いったい何処なんだ……！？）」

「あの……かなり混乱するのも分かるが、とりあえず一旦落ち着い

て話そうか。」

ハッと我に帰る吉影。脳内に吹き荒れる憶測をまるごと頭の隅にうつちやる。

「そ、そうだな、すまなかった……」

「ゴホン、……では改めて。私は上白沢慧音。この人里で寺子屋の教師をしている者だ。」

「そうか。私の名は……川尻浩作。しがないサラリーマンだ。よろしく。」

（寺子屋……？時代劇のような言い回しだな。）

君が治療を受けさせてくれたのか？」

「川尻か。こちらこそよろしく。」

（【さらにまん】？こういった職業なんだ？）

君を治療したのは診療所の医者、私は里の外の水田に血塗れで落ちていた君を発見して、運んで行ったんだ。」

「そうか……、ありがとう。君はわたしの【命の恩人】というわけだな。」

治療してくれた医者にも、後でお礼を言わないといけないな。」

吉影はそこで一瞬迷った後、思い切って目の前の女性——慧音に尋ねた。

「ここはいったい何処なんだ？」

君も日本語を流暢に話すが、まさか日本人なのか？

それから、この付近で、不審な少女が——————」

「まあ、待ちなさい。とりあえず順を追って説明していききたい——

————が、何から話せばいいやら……」

君の質問に対する答えは……」

吉影の顔が強張る。

慧音は一呼吸置くと、静かに話の続きをした。

「ここは……君たちのいう日本に存在する【幻想郷】という別世界。」

結界によって切り取られた、人と妖怪、神々や魔法使いが暮らす、

忘れられた者たちの楽園だ。」

「……………」

彼は理解した。彼女が何故日本語を流暢に話しながらも蒼い目や青みがかった白髪をしているのかを。

何故やたらと長く漢字変換もしづらい珍妙な名前を名乗ったのかを。つまり、彼は目の前の女性を、『仮想世界と現実の区別がつかなくなってしまうた、痛い子』なのだと認識したのだ。

「あ、あの……………、何か反応してくれないか？」

慧音が少し焦りながら話し掛けた。

「（マズイ、これは疑われてるな……………何とかして信用してもらわないと……………」

そう考えていた時、

突然、吉影がガバツと起き上がり、部屋の隅に畳まれていた自分の服をひつつかむと、

「助かったよありがとうこれ以上君に迷惑をかけるわけにはいかな
いから私はそろそろ失礼するでしょうそれじゃあ……………」

クルリと彼女に背を向け、吉影はこの場から去って行こうとする。

「えっ……………」

一瞬呆気にとられた慧音だったが、慌てて立ち上がり呼び止める。

「ま、待ってくれ話を聞いてくれ!!」

吉影は慧音が入ってきた方とは逆の方向の障子を開け縁側を歩いて足早に玄關と思われる方に向かう。

「いやもうホント感謝してるから私はこれまでもこれからも地に足をつけて真面目に生きていくからもう私に構わないでくれ」

「いやいや待て待てどう考えても感謝している態度じゃないだろうそれは!!?」

止めてくれ目を背けないでくれそんな養豚所の豚を扱うような冷たい態度しないでくれ!!」

「いい加減手を離せ近所の住民に注目されるなんてまっぴらだ……………」

「ッ!!?」

すがり付く慧音の手を払い除けようとした瞬間――彼は目を見開いた。

時間が止まったかのように、空気すらも停止し、音がこの世から消え去ったように思えた。

彼の目は、自分の手を掴む慧音の手に釘付けになっていた。

「(この手触り……!この質感!!この滑らかな肌!!!」

指の長さ、細さ、爪の大きさ、形、手首の流れるような曲線に気品漂う骨格、小指の第二関節……!

素晴らしい……完璧だ!!今までに48人の手の綺麗な女を殺してきたが、この手首はまさに神の賜物!!

ああ……なんと美しい!!手首の造形美に肌のしっとり部分が重なり合う美しさだ!!

『ハーモニー』とでも言うべきか?『美の調和』と言うべきだろうか!?)」

吉影の爪がメリメリと音を立て、目にもめる早さで伸びる。

「(『彼女』をここに残して去るのは、人生の敗北!私の心に後悔を残したまま生涯を終えることになる!!)」

【キラークイーン】を出現させ、腕を振り上げる。はやる気持ちを抑え、ゆっくりと慧音の白魚のような手首に狙いを定め……

「(さあ、来たまえ……!私の下に!!!!)」

【キラークイーン】の手刀が振り下ろされた!

「――ッ!?!」

突然グイッと強引に引き寄せられ、慌てて【キラークイーン】を止める。

ビタァッ

手刀は、吉影の腕の薄皮一枚を切って止まった。

「頼む、どうか……これから私がすることを、良く見てほしい。」

慧音の真剣な目付きに、吉影はかろうじて正気を取り戻し、なんとか衝動を抑える。

慧音は庭の木を指差し、吉影に言った。

「君はこれから起こることを、見たことがあるはずだ。君は目を疑うだろうが、信じてほしい、これは手品でも幻覚でもない！紛れもない現実なんだ！！」

そう言うのと、彼女は手を木に向け……

「ハアッ！！」

手から光弾を発射した！

光弾は木の枝をへし折り、枝は焼け焦げながら地面に落ちた。

「！！」

吉影は驚愕した。この女性は【キラークイーン】が見えていなかったのだから、スタンド使いでないことは確かだ。

だが、彼女は現に光弾を撃ち出した。やはり、スタンドとは別種的能力が存在していたのだ。

「君の腹部の傷は、この弾幕を受けた傷だろう？君は既に、ここが君の居た世界とは異なる世界なんだと気付いているはずだ！」

「……………」

「君の気持ちは、よく分かる。いきなり自分にとって非常識な現象を見せつけられ、しかもそれに傷つけられたんだからな。だが、何度も言うがこれは現実だ。いくら疑っても、否定しても、何も良いことはない。私も、君を助けたいんだ。頼む、信じてくれ。」

「……………」

吉影は、暫く黙って考え込んでいた。が、やがてゆっくりと口を開いた。

「……………私は…森で少女に襲われた時、自分の目を疑った…もしかして、頭か精神がいかれてしまったのかと、怖かった……」

迷いを断った目で慧音の瞳を見据えると、

「分かった。君を信用しよう。どのみち今人里を出て行けばあのクソガ…少女に、今度こそ喰われるだろうしな。」

「ほ、本当か？本当に信じてくれるのか？」

「ああ、勿論だ。」

これからこの世界：幻想郷だったか？について、詳しく話を聞かせてくれるかね？」

「構わないが、客人に何も出さないわけにはいかない。お茶を淹れてくるから、さっきの部屋で待ってもらえるか？」

「ありがたい。実は喉が渴いていてね。」

柔らかな物腰で話をつけ、吉影は自分が寝ていた部屋へと戻って行った。

「さて：どうしたものか。」

慧音の足音が遠のいてから、吉影は呟いた。

「あのように言っておいたから、まさか私が【能力】を持っているなんて、露ほども思っていないだろう。」

彼は策士である。さっきの言葉は、全て自分の【能力】を勘づかれないようにするための演技なのだ。

「その点については、問題はない。だが……………」

次々と現れ増殖する疑問に、自然とため息が出る。

「別世界だと？妖怪だと？まあ私自身も【スタンド】を持っているし、親父は【写真の世界】を支配する能力を持っていたが……………」

そういえば、親父：どうなったんだろうな……………」

吉影は、自分の父親のことを案じていた。彼は直接見たわけではなかったが、あのクソツタレ仗助の台詞によると、父親は爆死したらしい……………彼の放った爆弾によって。

「……………幽霊が、もう一度死ぬと、どうなるんだろうな……………あの小道へ行くのだろうか。あるいは魂が破壊されて……………」

吉影は、嫌な想像を振り払い、

「ひとまず私を知るべきことは、この世界に【平穏】と【安心】があるかということだ。そして、元の世界に戻る方法を探しだし、いつでも帰れる手筈を整え、確実な安心を得る。」

もしこの世界に、私の望む平穏があるのなら……ここでなんとかして暮らすのも、悪くないかもしれない。杜王町に居られないことは残念だが、ここにはクソツタレ仗助は居ないうえ、私の【正体】を知る者も居ない。

—————それに……」

吉影の瞳の奥で、影が蠢く。

「（生きている【彼女】にも会える……

【彼女】のしなやかな指の、妖艶な動きを見ていられる。

【彼女】の、柔らかな肌を、ずっと眺めていられる……

頬擦りしたり、舐めたりできないのは残念だが……それでも『彼女』が居れば、私の心の平穏は保たれる。ここでの生活が、私の安らぎとなり得る……」

吉影の表情は、はたから見ると、【恋人との幸せな時間】を思い浮かべているような甘い表情だった。

もしそのドス黒い欲望の渦巻く心を地下のマインドスキャン妖怪が覗き込んだならば、反吐を吐くこと請け合いだが。

「ふう……」

台所でお茶を淹れながら、慧音はため息をついた。それは、安心と悩み、双方からくるため息だった。

「とりあえず信じてはくれたが……これで良かったのだろうか……？」
2つの湯飲みにお茶をいれながら、慧音が呟く。

「……いや……言えるはずがない……」

お盆に湯飲みを載せ、河尻の待つ部屋へと向かう。

「彼が既に、『死んでいる』なんて……」

第二話 漂着 (後書き)

御覧いただきありがとうございました。

次回からいよいよバトル展開に突入、ようやくジョジョっぽく仕上がってまいります。R-15表現が多用されるようになりますので、ご注意ください。

第三話 復讐と露見 前編（前書き）

第三話です。やっとバトルシーンに突入し、盛り上がる展開となってきました。

グロ描写、残虐表現、一方的な勝敗が含まれるようになって参りますので、ご注意ください。

ジョジョの奇妙な東方Project避難所【<http://jbbs.livedoor.jp/otaku/11393/>】より
転載

第三話 復讐と露見 前編

「吉良吉影は静かに生き延びたい」

第三話 復讐と露見 前編

「やあ、あんたが件の外来人か。」

「そうだ。私は河尻浩作。君が案内してくれるのか？よろしく頼む。」

「いいっていいってそんな硬くならなくて。私は藤原妹紅。健康自慢の焼き鳥屋だ。こちらこそよろしく頼む。」

「済まないな。私のために危険な目に遭うかもしれないのに。」

「大丈夫さ。私は殺しても死なないって有名なんだ。それに、私も暇してんだ。ちょうどいい暇潰しになって、むしろこっちが……」

「ははは、冗談冗談。」

睨む慧音に、妹紅が少々慌てて弁解する。

吉影が慧音の家で目覚めてから、彼は外の世界に帰るまでの間、慧音の家に泊めてもらうことになった。

『幻想郷を覆う結界を管理する博麗霊夢という巫女に、とりあえずいつでも外の世界に帰れるように手筈を整えるよう頼み、それから暫くは幻想郷で暮らしてみたい』という、吉影の我が儘を慧音は快く受け入れた。が、診察所の判断で3日間養生することに決まり、その間幻想郷について慧音から詳しい話を聞いたり、人里を観光したりした。

吉影の噂は随分広まっていたらしく、外出時には目立たないよう和服を着ていたが、それでも彼は人々の、異質な存在を見る時の、好奇、そして時には敵意の視線に晒された。

実際には好奇心と好意を持って話しかけてきた人々が多数だったが、

『植物のように穏やかな心』で暮らしたい彼にとってそれらは全て心の平穏を乱す攻撃に他ならなかった。それでも彼は慧音の手首を手に入れるまでの異世界ライフを平和に楽しむため、愛想よく振る舞った。内心早くもうんざりしていたのだが。

そして3日間は大きな問題も起きず、予定の日、博麗神社へと向かう朝を迎えた。朝食を済ませ、案内兼護衛の妹紅という少女と挨拶を交わし、二人は博麗神社へと出発した。

彼らは人里から盆地へ出る門をくぐった。

人里の門から少し離れた場所。腰をひねったり、屈伸したりしている妹紅の後ろで、吉影は訝しげにその様子を見ていた。

「さあ、博麗神社までひとつ飛びと行くか！」

妹紅が準備体操を終え、吉影の方を振り向いた。

「ひとつ飛び？私は飛べないが……。」

「分かっているって。だからさ……。」

妹紅が吉影に背を向け、中腰になる。

「さあ、乗ってくれ。」

「……え？」

「いや、だからさ、乗ってくれて言ったんだよ。」

「……大丈夫なのか？」

「心配ご無用。早くしてくれ、あまり遅くなると帰りの途中で日が暮れてしまうぞ。」

「……分かった、じ、じゃあ、よろしく頼む。」

吉影が恐る恐る妹紅の背におぶさる。30代の男が、（少なくとも外見は）10代の少女におぶさるという、かなり滑稽な絵が出来上がった。

「（こ、これは恥ずかしい……。人里の人間の間で噂にならないといいが……）」

「さあ行くよ！歯を食い縛りな……！」

「……!!？」

一気に地から離れ、森の上空へと弾かれるように飛び出した。眼下を森の木々が流れていく、というか流れ去っていく。鳥の横を嵐の如く過ぎ去り、空の交通安全を乱しながら飛行する。

「どうだい、河尻？これ程高い場所にいるのは初めてか？」

風に白い髪をなびかせて、妹紅は振り返り得意げに笑う。

「…初めての感覚だ…生身でこれ程高く速く飛んだことはなかったな…」

妹紅は、かなりの安全運転で飛行していた。まあそれでもバイクで高速道路を爆走するくらいの風圧はあるのだが。

「生身？生身じゃなければこんなふうには飛んだことはあるのかい？」

「ああ、飛行機といってだな、上空何里もの高さを、ものすごい速さで飛ぶ乗り物があるんだ。種類によっては音の三倍の速さで飛行するものもある。」

「【音の速さ】…！？そ、それは凄い…想像できないな…」

やはり魔法は科学には敵わないのかもしれないね…

「いやいや、外の科学ではこんなふうには、何も道具を使わずに飛ぶなんてまだできない。コストも乗り物を造る年月もバカにならないしな。」

「成る程、どちらもそれぞれ長所短所があるということか。」

そんな会話をしながら、二人は博麗神社へと順調に近づいていた。

「おい、なんだあれは？」

「ん？どうした？」

妹紅は前を向き、吉影の指差す方角を見る。

そこには、鳥の群れらしきものがいた。それだけなら大したことないが、問題はその大きさである。普通の鷺だの鷹だの鳶だの、3倍以上の大きさだ。

「おおっと、おいでなすったな。」

不敵に笑う妹紅。

「なんだあいつらは？まさか妖怪か？」

「その通り！久しく輝夜と殺し合いしてなかったんだ、血がたぎっ

てきたよ…。」

群れはもう目前まで迫って来ていた。群れは列を組むわけでもなく、
てんでバラバラにこちらに突っ込んで来る。凶悪な嘴を打ち鳴らし、
ゾツとするような甲高い咆哮を上げて襲いかかって来る。

「しっかり掴まってるよ!!」

「!!?」

ギュンと加速し、妖怪共の群れの中へ突入する。吉影を一気にGが
襲う。耐え難い力に頭を大きく後ろに反らし、必死に妹紅の肩にす
がる。

先頭の一頭が嘴を開き、妹紅を八つ裂きにせんと、襲い来る。

「キシエエエエエ!!」

最小限の動きで嘴を避ける。その後ろの二頭の翼をぐぐり、次の
一頭の爪を左に避け、三頭の脇をすり抜ける。妹紅は妖怪共の間を
縫うように、瞬く間に群れを突破した。

「チッ、このままじゃ分が悪い!」

後ろを確認した妹紅が呟く。妖怪達は既に急旋回し、追跡して来て
いた。

「しょうがない、一旦地上に降りてあんたを下ろす!」

「なんだと!?!ち、ちよっと待ってく——————うあああ
あああ!!」

頭から地面に向かって一気にまっ逆さまに急降下する。さすがにこ
の衝撃には耐えられず、クラークイーンの腕を使わざるを得なかつ
たが、幸い妹紅は気付かなかった。真下の森の木々の葉をぶちまけ、
枝をへし折って突入する。地面が見えた瞬間、ギュイン!と身体を
回転させて見事に着地した。

「さあ、これから殺し合いするから、悪いけど自分の足で立つても
らうよ。」

「ま、待ってくれ、腰が抜けて……………」

妹紅に下ろされた吉影は地面にへたれこんでいる。

「おいおい、大丈夫かい?そんなんじゃ本当に死……………っ

「…………死んじゃうな。」

軽い雰囲気だった妹紅の口調が、突如真剣になった。吉影は訝しげに、立ち尽くす妹紅の背から目をはなし、周囲を見回した。そして、絶句した。

樹木の蔭に蠢く、無数の眼。

ギラギラと紅く輝く、渴望に満ちた双眸。

二人を囲み、涎を溢れさせながら油断なく隙を伺う、野獣の瞳。

「か、囲まれている…」

「そういうことだ。私でもこの数相手に『護りながら』戦うのは厳しい。死にたくないなら早く立ち上がって…」

「心配ありがとう。だがそれは無用だ。」

妹紅が振り向くと、吉影は既に立ち上がっていた。震え1つ起こさずに、背筋を伸ばして。その瞳に、恐れや不安は感じられなかった。

「ほう、やるねあんた。もし私があんたみたいに力もなく、見たこともない化け物の群れに囲まれたら、とてもそんな風には振る舞えないね。」

「何を言っている。私には君という慧音が紹介してくれた信頼できる護衛がいる。なにより、私は戦わない。ただ護ってもらうだけだ。何を足掻こうが無力なのなら、せめて何もしないのが最大のサポートというものじゃあないか。そうだろう？」

「ははっ、確かに戦うのは私だったな。」

空気が緩み、いつもの幻想郷に戻る。命をかけたらしめない、遊び感覚の決闘の雰囲気に戻る。

妹紅は気を引き締め、構える。

「私の背中に近寄れ。できるだけな。」

吉影は素直に従う。

森の暗さに慣れてきて、妖怪共の姿が徐々にはっきりと見えてきた。狼やヒト、熊を普通の3倍ほどに巨大化させたような、人との共通

点など欠片もない獣ばかりだった。

「ふん、知性のあるヤツは居ないみたいだな。これなら遠慮なくぶっ殺すことができる。」

妹紅の放つ気配が豹変する。

近くにいると焼けてしまいそうなほど、強烈な殺気。

何度も殺し、殺されかけた者の持つ覇気。

妖怪共はあまりの迫力に、ジリジリと後退りし、萎縮する。

「（なんという殺気だ……此処の少女達は皆こうなのか？）」

吉影は内心焦っていた。幻想郷の住民が皆恐ろしく強かったら、彼の安心は確立されず、なにより【恋人】を連れ帰るのに支障をきたす。

「——————戦う前に一応言っておくが……、私がもし、万が一死んだら、すぐに死体から離れてくれ。猛ダッシュで逃げるんだ。すぐに妖怪達は吹っ飛ばされる。その間に、一心不乱に逃げるんだ。」

「?……、分かった。」

会話が終わると、妹紅は妖怪の方に向き直った。

「なんだ、かかって来ないのか？食事をしに来たんじゃないのか？腹でも下したか？」

妹紅が一步前に出る。正面の妖怪がたじろぐ。

「そっちが来ないってんなら……こっちから行かせてもらおう!!」

妹紅が懷からスペルカードを取り出し、高らかに挙げ、宣言する。

「時効『月のいはかさの呪い』!」

妹紅を中心に、無数の光弾が放射状に放たれた!光弾は妖怪共の肉を容赦なく抉り、骨を砕き、脳髓を撒き散らした。

「グオオオオオオオ!!」

妖怪共が恐怖を怒りでもみ潰して襲いかかって来る。

「フン、他愛もないね。」

妹紅は次のスペルカードを手に取り、宣言する。

「蓬莱『凱風快晴—フジヤマヴォルケイノ—』」

大量の火球がばらまかれ、さらに炎の光線が放たれる。妖怪共は避けながら迫って来たが、そこに追い討ちとばかりに巨大火球が放たれた。向かって来た妖怪共は火球と光線に囲まれてやっと思だつたと気付いたようだが、もう遅い。身動きが取れず団子状態の妖怪に、巨大火球が突っ込む。火球は着弾すると爆裂し、爆発に巻き込まれた何十頭もの妖怪は派手に内臓をぶちまけて吹き飛んだ。血飛沫が樹木の根や土をどぎつい色に染める。

「(す、凄い……！ なんとという闘いだ……これだけの数の妖怪を、たった一人で圧倒している。爆発の威力はほぼ互角だが、攻撃範囲、手数が桁違いだ。真正面から戦えば、確実に負ける。こんなやつらがごろごろ居るのか？ この幻想郷には……)」
顔に影がさした。ハッと上を見上げる。

「妹紅！ 上だ！！」

さっき逃げ切ったと思っていた鳥の妖怪達が嘴を打ち鳴らし、急降下して来ていた。

「不死『火の鳥―鳳翼天翔』！！」

妹紅がスペルカードを抜き、宣言する。

不死鳥をかたどった三つの爆炎が迎撃する。爆炎は妖怪二、三頭を一瞬で消し炭にし、さらに後から突っ込んで来た四、五頭を骨にする。そのまま落ちて来た骨を蹴りでぶち壊す。

「(しかも肉弾戦まで……！ まさかいつも人間ではないのか？)」

吉影の思考はその対象の叫びによって中断された。 「危ないっ！！」

「うあっ！？」

妹紅に襟首を掴まれ、強引に空中へと引き摺られるようにして飛んだ。一瞬前まで立っていた場所に巨大な岩が落ちてきた。

「畜生、あいつだ！！」

妹紅の視線の先にはやや離れた場所にヒヒの妖怪がいた。どうやらこいつが投げたようだ。

「ッ！」

また上だ!!」

「はっ!？」

まだ残っていた鳥妖怪が、目前まで迫っていた。

「まずい!!」

妹紅は急旋回し凶悪な嘴 を避けた。だが……

「うわっ!!」

「し、しまった!!」

吉影から手を放してしまった。吉影は地面に激突する直前に【キラークイーン】を出現させ、その腕でバレないように受け身をとる。即座に立ち上がり、妹紅の様子を確認したが、どうやらバレなかったようだ。

「河尻! 危ない!!」

妹紅が必死の形相でこちらにものすごい速さで飛んで来た。

「ハッ!!」

振り返ると、巨大岩が一直線に飛んできた。

「(まずい!!)」

キラークイーンを出現させ、自分はその場に伏せる。巨大岩を自分に当たらないように、そして不自然に見えないように、絶妙に軌道修正して受け流した。

「(危なかった……だがこれでひとまず危機は回避できた……、…ッ!?)」

妹紅は空中で止まっていた。吉影に驚愕の表情を向けながら。

「(何イ!? まさかバレたのか? そんな馬鹿な! 軌道修正は完璧だったはずだ!! なぜ…いったい何故!?)」

妹紅は呆然とした表情のまま、吉影の背後を指差す。「それ…なんだ?」

吉影は振り返り、愕然とした。吉影を狙ってきた岩は、彼に命中しなかったことによって、彼の背後へと迫っていた狼型の妖怪を押し潰していた。普通なら奇跡に喜ぶところなのだろうが、この場合は不幸に他ならなかった。

【キラークイーン】は血飛沫を浴びていた。スタンド使いでなくても、巨漢の人型の存在を認識できるほど。

「（な、なんだとオッ！?）」

妹紅を見る。彼女は知ってしまった。彼女に知られてしまった。自分が能力を持っていると。自分は嘘をついていたと。

「（どうする？ どうすればいい？）」

【始末】するか？ いや、容易く骨にされるだけだろうし、今は妖怪を倒さなければならない。

話し合い？ そんな状況ではない。

無視して妖怪と戦う？ そんなことをしても、彼女は納得しないだろう。

いったいどうするべきか……………、
っ！?）」

ふつと吉影は彼女の背後に目を移した。目を見開く。

「ハッ！?」

妹紅がふりかえったが、遅かった。突然発生したどす黒い霧が妹紅を飲み込んだ。

「何イ！?」

キラークイーンの脚でバックジャンプし、霧から逃れる。霧の中から、肉が引き裂かれ、液体の迸る音が聞こえた。

「この霧——————冗談だろう…?」

霧が晴れると、そこには、喉を喰い千切られ、動かない妹紅の身体があった。

「そうだよ。お久しぶりだね♪」

「やはりお前か……こいつらはお前の子分か？」

「ううん、違うよ。ただ『外来人がこの辺にいたよ。』って言うたら勝手にいうこと聞くようになったただだよ？」

「成る程、私を消耗させてから襲うつもりか。とりあえず顔を見せてもらいたいんだが…?」

「やっだよ♪あなたの念力の射程とか能力を観察するんだから。」

スピードはクソツタレ仗助の【クレイジー・ダイヤモンド】と互角、パワーはそれ以上かもしれないッ!!」

【キラークイーン】の脚を後ろに蹴り上げる。背後から飛び掛かってきた狼三頭が臓物をぶちまけて吹き飛び、樹木の幹に叩きつけられ、動かなくなった。

「（しかも【気配】にも敏感になっている。堪も冴えてきた……そういうば昨日通過した森の茸の胞子は魔法使いの力を高めるとか妹紅が言ってたな。これもその作用か?）」

【キラークイーン】の性能の向上を実感し、吉影はルーミアの居場所を探るべく辺りを見回す。

「うわぁ、すごい♪でも残念、捨て駒はまだまだたくさんいるよ。」

「いい加減出て来たらどうだ? 今ならまだ3分間痛め付けるだけで赦してやるが……」

「まうだよ。かくれんぼはちゃんと自分で探さなくちゃ。」

「……分かった。探して見つけ出して死なない程度に殺してやる。」
自分の近くにいた妖怪を殴り飛ばし、

「お前、【スペルカードルール】で戦うつもりはあるか?」

「何言ってるの? 外来人のくせに。【スペルカードルール】はあくまで幻想郷の住民のための制度。あなたには適用されることはないよ。」

「つまり、これは【ルール】に則った決闘ではないということだな。よかった、私が断然有利というわけだ。」

「……本当に何言ってるの? 【スペルカードルール】なしに人間が妖怪に敵うはずが……」

「『【殺し合い】なら得意分野だ』、と言っているんだよ。」

吉影の瞳が、殺人鬼のそれに変わった。

「フツ、面白い冗談だね。」

ルーミアとの会話が終わり、声のした方向からおおよその位置を探り出した吉影は、さらに彼女の居場所を絞り込む策を実行する。

「さて、コイツも強化されているか実験してみるか。」

【キラークイーン】が左拳を突きだす。

「『【キラークイーン】第二の爆弾』、【シアーハートアタック】
！！」

手の甲からドクロを模した一台の小型戦車が発射された。

「目標はクソケダモノ共より離れた場所にいる人型の熱源だ。途中の敵は爆破しろ。さあ、捜せ！！」

【シアーハートアタック】が頭上を旋回しルーミアを探している間、近寄る妖怪の頭を潰して【爆弾】に変えて投げつけ、牽制する。

すぐに見付けたらしく、地面に降り、キャタピラでパワフルに土を掴み走り出した。

「コッチヲミロォ」

【シアーハートアタック】は地面の凹凸を利用して元気よく妖怪の腹を突き破り、口に飛び込み、内側から爆殺していく。妖怪は何が起こったかも分からず、大混乱に陥っている。

「成る程、そこか。」

【シアーハートアタック】が向かって行った方向を見る。その先には特別巨大な樹木があった。

「【シアーハートアタック】、もういい。そいつを監視しながらコイツらを片付けてくれ。」

再び飛び掛かってきた妖怪をぶちのめしながら命令を与える。【シアーハートアタック】はそれに従い、吉影を囲む妖怪の群れに突っ込んで行った。たちまちの内に妖怪共は激減したが、妖怪はかなり近くまで迫って来るようになった。

「まずいな…爆発に巻き込まれる。仕方ない。」

【シアーハートアタック】を戻し、両手でラッシュを叩き込む。

「しばばばばばばばばッ！！」

妖怪共を叩き、潰し、蹴り、ぶっ飛ばす。【キラークイーン】は全身に血を浴び、もはや元のショッキングピンクの肌は見えない。

「むっ？」

飛んできた巨大岩を片手で粉碎する。破片が妖怪共の肉を穿ち、痛みを伝える。

「さて、そろそろいいか。」

吉影は先ほど【シアーハートアタック】が示した方向に向き直る。妖怪は遠巻きに吉影を眺めるだけで、ただ震えている。

「そこにいるんだろう？ 出てこい。」
樹木の陰に呼び掛ける。

「うふふ、せーかい♪」

ルーミアが陰から姿を現す。輝く金髪、紅い瞳、忘れもしない、その姿。

「あなた、本当に凄いなだね。これだけの数の妖怪を、弾幕も撃てないのに、たった一人で倒しちゃうなんて。」

ルーミアが可愛らしく、妖しく、不気味に笑う。

「でも、あなたも相当消耗しているはずよ。その状態で私と、残りの妖怪に勝てるかな？ ♪」

吉影はただ彼女を睨み付けている。

「それに、あなたの念力の射程距離も形も分かったよ。形は人型、射程はだいたい2、3メートルってところでしょ？ 爆発は私の位置が分かっていたのにできなかったんだから、半径15メートルくらい――――」

「――――だな。」

「え？ なになに？ 何て言ったの？」

「【かくれんぼ】はお終いだな、と言ったんだ。私の勝ちでな。」

「：まあ、そうだけど、でも――――」

「じゃあ、罰ゲームだ。君はもうお終いだが、その前においたのことは謝ってもらわないと。」

とりあえずそこにひざまづいてもらおうかな。」
静かな、しかし冷たい声色で吉影は語りかける。

本気の自分が人間ごときに負けるわけがない。そう考えていたルーミアには、彼の言葉は思い上がりも甚だしい只の世迷い言か新手の

ジョークに聞こえたのだろう。

「フフッ、そんなこと言って……」

クスクスと笑い、彼女が口を開いた時、

「ひざまづけッ!!」

ドグオオオオオオオオ!!

吉影の怒号が響いた瞬間、二人を囲んでいた妖怪が爆炎と共に吹き飛んだ。それと同時に、

「……………えっ……………っ?」

ルーミアがくずおれる。立ち上がろうと足に力を入れようとするが、意に反して全く動かない。恐る恐る自分の足を見た。

「きゃあああああああああ!!」

彼女の両足はズタズタに崩れていた。

「……………先ほど飛んできた岩は【キラークイーン】が爆弾に変えてから打ち砕いた。

小娘、貴様の隠れている樹のそばにばらまいておいた破片が爆発したのだ。」

両足を破壊され悲鳴を上げるルーミアに、吉影はゆっくりとした、だが確固たる足取りで歩み寄って行く。

「あっ、ああっ! 足が! 私の足が…」

「……この世界に流れ着く前、私が住んでいた町では、年に一回救急講習が開かれていたんだが……」

「いっ、痛い! 痛い!! 痛い!! ああっ、足、足が…」

「君と戦った後、真剣に受けておくんだったと後悔したよ……技術を身につけなくっちゃあな……」

でもああいうのに通っている連中ってのはどーなんだろうな? 一週間も歯磨きしてないヤツが、人形相手に人口呼吸練習したり、それを使い回したりしてるのかな…?

「ああっ、立てない! 立ち上がれない……………」

「【キラークイーン】に抱えられて樹の上を移動していた時が一番応急処置の必要性を実感したよ……抉れた傷口が開いてね……立

叩き込むつもりだったが、これほど至近距離に妖怪がいると自分も巻き込まれてしまう…」

気配と音だけで襲い掛かって来る妖怪を見切り、ラッシュを叩き込む。

「しかもコイツら、やたらと感覚が鋭い。若干私の方が不利か…」その時だった。

ドドドドドドドドドドド!

聞き覚えのある地鳴りのような轟音が響いてきた。

「!!」

まさか!?

弾幕が襲い掛かってきた!!

「うおおおおおおお!!」

【キラークイーン】で妖怪一頭を掴み、ぶん回す。

盾にされた妖怪は他の妖怪や弾幕にぶつけられ、ボロ雑巾のような醜い姿に成り果てる。どうやらルーミアは無差別に弾幕を張っているらしく、弾幕に巻き込まれた妖怪の肉片が吉影の顔にへばりつく。

「クソッ、大切な一張羅を!!」

弾幕が止んだことを確認し、原型が分からなくなるほど崩れて肉塊と化した（実際には見えてないが）憐れな妖怪を投げ棄て、人の頭ほどの大きさの石を拾い上げる。

「光が消滅か吸収かされるなら……コイツでどうだ!？」

【キラークイーン】の指先が石に触れる。

「【だいたい】で良いんだよ……この大きさなら、かなりの威力を発揮できるからな……」

弾幕が向かって来た方向に向き直り、【キラークイーン】に投擲姿勢をとらせる。

「やれっ! 【キラークイーン】!!」

【キラークイーン】が石を大砲のごときパワーで投げ飛ばした。

ドグオオオオオオオオオオオ!

最大威力の【第一の爆弾】が爆発し、耳をつんざくような爆発音が

轟いた！

「きゃあああああああああ！！！」

「「グオオオオオオオオ！！！」」

金切り声と共に闇が晴れていく。

やがて完全に闇は消え失せ、気絶した妖怪と、宙に浮きながら目を回し、耳を押さえて呻いているルーミアの姿が見えた。

「——————爆風を受けた時、最も傷付きやすいのは眼球と鼓膜だそうだ。初めてこのような使い方をしたが……………上手くいったようだな……………」

耳を塞いでいた手を下ろし、【キラークイーン】の脚で跳躍する。

「ううつ、耳が…頭が…ジンジンするう…」

昏倒寸前の彼女の前に、突然吉影が現れる。

「あつ——————」

ドグシュ！！

【キラークイーン】の拳が、ルーミアを貫いた。

「がはっ…！？」

ぶっ飛ばされ、樹の幹に背中を打ち付ける。骨がへし折れる音が聞こえた。

「ぐあっ…！！」

地面に倒れ込み、そのまま顔を伏せる。腹から流れ出した大量の血液が、巨木が根を張る土に染み渡り、紅葉の落ち葉のように地面を赤黒く染め上げる。

ルーミアは苦しげに呻き、力を振り絞ってどうにか顔を上げた。

吉影の姿は無かった。ルーミアが何故彼はすぐに姿を現さないのか訝しく思った時、

「え…？」

突然彼女の周りが陰った。上を見上げる。

妖怪の死体がグングンと迫ってきた。

「なっ…!？」

ドグシャアアアア————

ルーミアの体が死体の下敷きになった。

吉影はさらに5体10体20体と、死体を投げ飛ばす。瞬く間に死体の山が築かれ、破れた腹から飛び出した内蔵や頭部から転げ落ちた脳髓や眼球が周囲に土手を築き上げる。

「—————さて、これだけやればペシャンコのグジュグジュになっているだろう。」

手をパンパンとはたたきながら、自らが築いた死体の山を眺めて呟く。
「だが、まだしぶとく生きているかもしれない。確実なる安心のため死体を確認して髪の毛一本残さず爆破するでしょう。」

吉影は油断なく死体の山に歩み寄って行った。

吉影から見て死体の山の反対側に当たる場所。狼の妖怪の死体が、二度と光を見ることがない目を見開いていた。何も動くものはない。狼の頭が、ピクリと動いた。

ゆっくりと顎を開いていく。

やがて顎がはずれるほど大きく開き、中から血と臓物にまみれた物体が顔を覗かせた。

それは周囲をキョロキョロと確認し、吉影の姿がないことを確かめると、おそろおそろ死体から這い出てきた。

うつ、と呻いて傷を押さえる。腹にぽっかりと開いた穴が痛む。

「—————これだけやったんだから、私が生きているなんて夢にも思っていないだろうなあ……」

そのままいなくなってくれば、助かるんだけど……………」

ルーミアは願いながら、這いずってこの場から離れようとした。しかしそのとき、最悪の知らせが敵によってもたらされた。

「さて、これだけやればペシャンコのグジュグジュになっているだろう。」

だが、まだしぶとく生きているかもしれない。確実なる安心のため死体を確認して髪の毛一本残さず爆破するでしょう。」

———ゾォツ———

ルーミアは死体の山の陰で戦慄した。

あの外来人の発する気配が、其処らの妖怪なんかより遥かに冷たく、自分の造りだす闇よりどす黒い殺気が、彼女を襲った。

「（なに：なんなの：この人間？ 霊夢や魔理沙とは比べ物にならない：！二人より遥かに弱いはずなのに：！）」

彼女は彼に見つからないように身を縮め、必死に震えを抑えつけて、這いずって逃げようとした。しかし……

「何処に行こうというんだね？」

「ひいっ！？」

背後から掛けられた声に縮みあがる。駄目だと分かっているのに、逆らえず振り返ってしまった。

そこには吉良吉影———殺人鬼が、全身血みどろの姿で、彼女を見下ろしている姿があった。

「あ……ああ……」

あああっ！！」

ルーミアが声にならない悲鳴を上げる。目が涙で滲む。震えが止まらない。身体がいうことを聞かない。「こ、来ないで……！お願い

！た、助け———」

涙声で赦しを請おうとした時、吉影は世間話でもするように彼女に

語りかけた。

「『傷薬』：持ってるかね？『消毒液』でもいいが？」

「…え…………？」

「ン？持っているかと聞いているんだよ。『傷薬』か『消毒液』持ってるかね？」

唐突すぎる質問に戸惑いながらも答える。

「う、ううん、持っていない……………なんのこ…と？」

「持っていない…か……」

じゃあ私のを使いたまえ。」

吉影が、慧音に渡された傷薬の瓶を取り出し、ルーミアに差し出す。訝しげにそれを見るルーミア。

彼女が瓶を凝視している前で、吉影は瓶の蓋を開け、指先で中の塗り薬を掬い—————

ビツ

ルーミアの両目目掛けて、塗り薬を飛ばした。

「きゃあああああああああ！？」

激痛のあまり泣き声を上げ、うずくまるルーミア。「強盗とかの人質は目隠しをされると、とてつもない恐怖感に襲われ、パニックに陥るそうだ…宵闇の妖怪には効かないかと思ったが、効果てきめんだな。」

「ううつ、目が、目があ…、痛い…見えない…」

激しく目を擦るが、逆に目を傷つけるだけだ。

「私は君に近づかない。もう前のように油断してノコノコ近づいて足を潰されるのはゴメンだ……」

だから…」

小石を拾い上げ、【キラークイーン】にいつでもルーミアを狙撃できるように構えさせる。

「君から少し離れた位置から、狙撃することにする。だが…いくら精密動作性が上がったとはいえ、この距離でこんな不細工な小石を命中させる自信はないな……」

もう少し近寄ってからじっくりと狙い撃ちするとしよう……」
苦しげにうずくまるルーミアに、少しずつ歩み寄る吉影。

ルーミアは這いずって逃げようとせせず、ただ泣いていた。

吉影は隙を見せずに、慎重に足を進める。

一步……二歩……、小石を確実にぶち込める射程距離まであと一步まで迫った時……

「……………フフツ……」

吉影がハッと足を止める。【キラークイーン】の目でルーミアを凝視し、観察する。

いつでも小石を撃ち出せるよう、【キラークイーン】に照準を定めさせる。

「……?」

「フフツ、アハハ……クスクス………」

ルーミアが上半身をゆっくりと起こす。吉影の方に向き直り、見えない目を強引にこじ開ける。涙が頬を伝う。

「ハハッ、プフツ、アハハハハハハハハッ……」

「……………」

吉影の身体に緊張が走る。拳を震わせ、目の前で可愛らしい声で不気味に笑う宵闇の妖怪を睨み付ける。

「キャハハッハハハアハハアハハハハハハハ……!!」

西部劇の早撃ちのように瞬時に狙いをルーミアの眉間に定め、発射しようとした瞬間……!!

「ブラックアウトオオオツツ……!!」

ガバツと飛び起き、渾身の声で叫ぶ! 闇が爆風のように拡散し、吉川を呑み込もうと迫る……!!

「遅いわアツ……!!」

【キラークイーン】の親指が小石を弾き出す! その瞬間……!!
ビュオオオオオオツツ!

「なにイツ……!!」

背後から襲い掛かってきた鳥妖怪を左拳で殴り飛ばす。

「クソッ！まだ残っていたのかッ!？」

その一瞬の動作のために、【キラークイーン】の手元が、僅かにずれる。

「なあッ、しまった!!」

もう遅い。すでに放たれた小石は闇に吞まれてしまった。一瞬後、吉影も闇に吞み込まれる。

—————小石がルーミアを貫く音が聴こえてくることは、なかった。

第三話 復讐と露見 前編（後書き）

御覧いただきありがとうございました。

この話は当時、ようやく書きたいバトルシーンにとりかかることができたので非常に楽しく書いていました。そのせいでいくつか設定に矛盾ができて、修正する羽目になってしまったのですが・・・次回以降はバトルが基本になってまいります。中盤以降になるほど、温めていたネタを一気に放出しているので楽しんでいただけるかと思えます。

そこからは大変「ジョジョらしい」能力バトルが繰り広げられているので、「なんだ、ツマンネーな」と思われている方、どうか第？話まで我慢していただくようお願いいたします。期待は裏切らないことを【約束】します！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6146y/>

～吉良吉影は静かに生き延びたい～

2011年11月20日17時00分発行